高松短期大学紀要　第十七号　一～二十頁（一九八七）

伊勢日記私注(一)

――その伝流と享受の位相――

松原輝美

はじめに

―『伊勢集』伝本の事など―

昭和61年の年頭にあたって、全四巻を予定されている反町茂雄氏の「一古書肆の思い出」の等一巻「修業時代」が刊行になった。これは、昭和大恐慌のさなかの昭和二年、東大を終えると同時に、古書業界に飛び込んだ反町氏が、日本有数の古書肆として、現在の大成に至る、その修業時代を回想したものである。その、古書肆としての大成に向けて始動する青春の経緯が熱っぽく語られてゆく、これはこの上もなく吸引力に富んだ回想の記録であるが、その修業時代の数多い挿話の中での圧巻は、昭和四年十一月から年末にかけての「九条家本購入始末」の事に係わる第九章よりの三章である。

そこには、平安朝文学の伝本博捜に情熱を傾ける若き日の池田亀鑑博士の花々しい武者振りも語られているのだが、その頃の日本の国文学界と国語学界とは、新しい時代を迎えようとしていた。古典の本文調査時代、異本探究時代、ともいうべきエポックが始まりかけていた。それは直ちに古写本の蒐集につながってゆく。学界の機運は、あたかも九条家本を歓迎すべく、熟していたのである。

昭和四年までは、私共の業界の商品の主力は、明らかに江戸時代の版本にありました。だが、昭和四年十二月十日の九条家本入札を転機として、この大勢は、徐々に古写本の方へと傾斜し、あとは一年一年、時に若干の緩急を示しつつ、傾斜度を増しました。九条家入札会は、このターニング・ポイントとして作用したのでした。

江戸時代版本から古写本へ、という動きは、この後永く継続します。戦後に到って、卓抜優秀な古写本の市場への流出が飛躍的に増加し、昭和二十二、三年から四十二、三年頃まで、古写本全盛時代が現出しました。重文や重美の古写本が、業界の中心を占領しました。

こんな風に当時を回想する反町氏が、本稿に於いて稿者が取り上げたところの『伊勢集』の古写本との係わりの、その顚末について述べるところはこうである。（藤原定家筆『伊勢集』（冷泉家本）のこと。『天理図書館の善本稀書』昭和五十五年三月一日刊所収）

昭和二十二年と言えば、敗戦後の社会的・経済的混乱の絶頂です。年の半ば頃に、突然に、その頃には珍しい長距離電話がかゝって来ました。急にお目にかけたい品があるから、明日持参したいという、この人としては初めての申し出。キット良い大物の話に違いない、直ぐにO・K。翌朝九時過ぎに、来訪したMさんの風呂敷包みの中からとり出されたのは、十八糎平方ほどの古い白木の桐箱一つ。この一箱の中に、あの定家筆の『伊勢集』と、伝西行筆の『山家心中集』の二帖が、重なって同居して居ました。

Mさんの帰ったあと、ゆっくりと見、又調べてみますと、ますます二つとも良い本です。『伊勢集』は、書写の年代の古さ、筆蹟の良さ、全体の姿の好ましさの外に、橋本不美男教授の解説にあります様に、西本願寺本・群書類従本とは別系統の異本です。歌仙家集とも異同が少なくなく、従来全く知られて居ない新資料です。

淡褐色の鳥の子紙の表紙の中央少し左寄りに、打ちつけに大きく「伊勢集」と自筆で題した、七百余年前の原表紙そのまゝの好もしい原装。墨付の紙数も多く、どっしりとした重量感の冊子。為家・為相以来の冷泉家の秘笈で、全巻に小虫一つないのが、このお家の本の特徴です。

その秘笈を、目録には絶対のせぬ事、また、冷泉家ではこれを極秘裡に整理されたものだから、その出所を必ず秘密にする事、というMさんの懇請を反故にして、反町氏は、その年末の古書展でこれを目録にのせてしまう。当時、反町氏は仕入れの金に窮していたのである。無論、Mさんからは怒られ、それから以後、相当長期間にわたって、反町氏はMさんから目星しいものを売ってもらえなくなる。

そして、『伊勢集』の方も、二十二年末の古書展では売れず、売れたのは、四・五年の後。その後、二転三転して、ようやく昭和四十二年かに、天理図書館に入ることになる。七百年来安住の秘庫を離れて、流転の波に漂蕩すること二十年余、ようやくにして永住の処を、こんどは公開の宝蔵の内に見出したわけである。

正に、反町氏の語るごとく、国文学界の機運に表裏して、江戸時代版本から古写本へと傾斜してゆく古本業界の動向や、その古写本たる秘笈の伝来の様相のさまざまは、それ自身優に一つの物語たり得るのであるが、これを当面の『伊勢集』古写本の伝来に絞ってみた場合、『伊勢集』の伝本には、反町氏もその回想記の中で触れる通り、

㈠西本願寺本系統（島田良二氏はこれを「一類本」と命名されている）

㈡群書類従本系統（同「二類本」）

と、更に、天理図書館に現存するその祖本に反町氏の係わった

㈢定家書写本系統（同「三類本」）

との三つの系統がある。

㈠の「西本願寺本系統」（「一類本」）は、平安時代後期の書写にかかる国宝西本願寺本を祖本とするもので、西本願寺本の書写年代から推して、天永年間（一一一〇年～一一一三年）から元永年間（一一一八年～一一二〇年）には成立していたと思われる。巻頭は「寛平みかとの御時・・・」で始まって、所収歌数は四八三首。

㈡の「群書類従本系統」（「二類本」）は、室町時代中期の延徳二年（一四九〇年）二月に三条西実隆が禁裏御本を転写してから流布したものであるが、それ以前に同系統の写本が、藤原清輔の『袋草子』（一一五六年頃成立）などに引用されているから、成立は平安末期と推定される。巻頭は「いつれの御時にかありけむ・・・」で始まって、所収歌数は、この系統の最も古い書写である伝飛鳥井雅子（父の飛鳥井殿雅親卿は一四一七年～一四九〇年の人）筆本で五二一首。

なお、この系統本の流布に貢献した三条西実隆については、前述反町氏の「九条家本購入始末」の中にこんな風に出ている。

九条家には、足利末期から信長、秀吉時代にかけて稙通（たねみち）（一五〇七年～一五九四年）という、優れた学者が出ている。二十七歳の若さで、関白・氏の長者という最高位に昇ったのみならず、独自の政治的見識を持して、信長、秀吉に対しても容易に下らなかった人。終生源氏物語を愛読し、その義に精通して「源氏物語孟津抄」という五十四冊の大著を著している。また、伊勢物語にも詳しく「伊勢物語九禅抄」という著書もある。この稙通の母保子が足利中末期の公卿社会の最大の学者兼古書蒐集家であった三条西実隆の娘である。二段階も高級の名家に輿入れした娘の、初生の男子が秀才とあっては、老祖父の喜びは察するに余りがある。実隆は稙通の学問的生長のために、心細かい教導をし、佳書を選んで与えもしたであろう。求めに任せて書庫の扉を開いて、惜しみなく善本、稀書を貸し与えて、自由に写させもした事は、容易に想像される、と。

その実隆が、自ら筆を執って、禁裡に秘蔵されていた『伊勢集』の御本を書写したのは、実隆公記によれば、延徳二年（一四九〇年）の二月四日或は二月九日などで、時に、実隆は三十六歳の盛年であった。

㈢の「定家書写本系統」（「三類本」）は、前述の通り、反町氏の「藤原定家筆『伊勢集』（冷泉家本）のこと」に、その戦後に於ける

伝来の経緯が語られている。その定家自筆本を祖本とするものであり、その祖本は、これも反町氏の述べられる如く、天理図書館に現存し、天理図書館善本叢書の『平安諸家集』に影印覆刻されている。成立は定家自筆本から推して、それ以前の平安末期と思われる。巻頭は、「二類本」に同じく「いつれの御時にかありけむ・・・」で始まって、所収歌数は、これと同系統の正保四年（一六四七年）梓行の「歌仙家集」が、定家自筆本の落す二十八首を「神宮文庫本系」から増補して五一三首。

ところで、以上三系統の伝本は、いずれをその原型とすべきかについては、容易にこれを決しがたい。しかし、いずれにせよ、この三系統は、内容と配列からみて、同一の祖本から発し、本文の校訂、改訂、増補などを繰り返して今日の形になったものと思われる、と片桐氏は推断される。そして「新編国歌大観　第三巻　私家集編Ⅰ」（昭和60年5月16日初版発行）では、西本願寺本系統は、昭和四年（一九二九年）に分割されている（分割の結果、石山切と呼ばれている）が、複製本によってその全貌は知られるとされて、これを底本に選ばれた。

しかし、その直後に書かれた『伊勢』（新典社刊「日本の作家7」昭和60年8月10日初版発行）では、一転して、定家書写本系統に依られているのである。

その事について氏は、「私は㈡の群書類従本系統は、㈠の西本願寺本系統と㈢の定家本系統の接触によって出来あがった本だと断じてよいと思うものの、㈠と㈢のいずれが本来の形であるのか断定出来ないように思う。ある部分では定家本系統の方が古いと思われても、別の部分では西本願寺本系統の方が古いと思われたりすることが一再ならずあるからである。しかし、それにもかかわらず、内容と配列から見て、両者は同一の祖本から発し、本文の校訂や増補を繰り返しつつ今日の形になったらしいということも否定できない。」と、「新編国歌大観」に於ける解題の言葉を繰り返しながら、従って、本書（新典社刊『伊勢』のこと）に於いても、どの系統の本に従って論を進めてゆくべきか、ずいぶんと迷ったのである、と上記二者の御著述の底本の決定が長い困惑の果の選択であったことを告白しておられる。

そして、後者の、新典社刊『伊勢』に於いて、西本願寺本系統を離れて、定家筆本の系統を選ぶに至った、その理由を氏は『伊勢集』と『源氏物語』との深い関係に求めておられる。

即ち、『伊勢集』に収められている「長恨歌」の歌をはじめとして、伊勢の歌の影響を受けたと想定される紫式部は、女流文学者の先人としての伊勢を尊敬していたであろうことは容易に首肯出来る。その式部が、この「いづれの御時にかありけむ・・・」を冒頭文にする定家筆本の影響のもとに「いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたま

ひけるなかに・・・」と桐壷の巻を語り出したのではないかと言うこともまた容易に想定出来ることである。そこで氏は、「いづれの御時にかありけむ・・・」で、その冒頭を語り出してゆく定家筆本によって、伊勢の境涯の、その前半生を追尋してゆこうとされたのである。

この『伊勢集』から『源氏物語』へという従来の通説を肯定して、片桐氏と同じ表題の著書『伊勢』（集英社刊「王朝の歌人5」昭和60年8月25日初版発行）の中で、秋山虔氏は、「桐壷巻と長恨歌と伊勢の御」や『源氏物語事典下巻』所収の、「所引詩歌仏典」の作者索引などの玉上琢彌氏の仕事を紹介して、「紫式部は、貫之の文学上の位置は高く認めていたようであるけれども、一方身分低き者と見下した気配もどうやらあるように感じられる。これに対して伊勢の御は好個の目標物であったらしい」と述べる玉上氏のことばを反芻に値すると言っておられる。

また「桐壷」巻に次のような文章がある。

このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ。

「長恨歌の御絵」とはどのような絵なのか、『源氏物語』の本文からはあきらかでないけれども、いっぽう、伊勢によって実際に詠まれた和歌の数かずを、私どもは『伊勢集』のなかに屏風歌として見いだすことができるのである。その歌うたは、それらが桐壷帝によって朝夕に口ずさまれたものであること、すなわち紫式部がその心を触発されて、物語の世界を紡いだものであることを思うと、私は感慨を禁じえなかった、とも秋山氏は言われる。

更に、玉上琢彌氏によって指摘されるように、この「伊勢の御に対抗して、紫式部が詠み試みたもの」として、光源氏に、やはり「帝の御になして」次のような「長恨歌」をふまえる歌を詠ませているのは興味深いと秋山氏は言われる。それは「葵」の巻である。

葵の上が他界したのち、源氏は左大臣邸にこもって七七日の喪に服し、やがて紫の上の待つ二条院に帰っていったが、そのあと、左大臣が源氏の残していった手習いの反古を見て嘆きに沈む条である。

御帳（みちょう）の前に御硯などうち散らして手習ひ棄（す）てたまへるを取りて、（左大臣が）目をおししぼりつつ見たまふを、若き人々（女房達）は、悲しき中にもほほ笑むあるべし。あはれなる古言（ふること）ども、唐（から）の倭（やまと）のも書きけがしつつ、草（さう）にも真字（まな）にも、さまざまめづらしきさまに書きまぜたまへり。（左大臣は）「かしこの御手や」と、

空を仰ぎてながめたまふ。（源氏を）他人に見たてまつりなさむが惜しきなるべし。「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また「霜の華白し」とある所に、

君なくて塵積りぬるとこなつの露うちはらひいく夜寝ぬらむ

一日の花なるべし、枯れてまじれり。

古注の指摘するように、前の「亡き魂ぞ」の歌は『古今和歌集』哀傷の、

声をだに聞かで別るる魂よりもなき床に寝む君ぞ悲しき

読人しらず

を本歌とすることはあきらかである。この『古今和歌集』の歌は、自分の臨終にさいして他国にある夫を思う女の歌であり、源氏の歌はそれにこたえるかのように詠まれている。島津『講話』は「厳密に言えば、長恨歌の詩句に取り合わせて、古今の右の歌から脱化させた作とすべきであろう」と説いているが、まさに紫式部は、伊勢の「長恨歌」をふまえた和歌詠作に対抗して、『古今和歌集』の歌により、ということは和歌詠作の先蹤を受けつつ、「長恨歌」の詩句に対応したということになるだろう。

玉上氏は「伊勢の御に対する紫式部の対抗意識を知るべきである」とも説いておられるが、いかにも紫式部は「長恨歌」の屏風にかかれていた伊勢の和歌の、「長恨歌」の詩句に即したいわば翻案であるかに似た詠風にたいして、自覚的に和歌の伝統をふまえた歌を源氏の口に詠ませたのである。

紫式部の意識にはたらきかける存在としての伊勢の重さ、大きさを私は教えられたのである。

以上の如く、秋山氏は、『伊勢集』から『源氏物語』へという、結局は従前の通説を踏まえて、定家筆本を選択された片桐氏の立場を、充全な形で補強されているのである。ところが、そうして、片桐氏の選択を容認されたうえで、氏は、「だが、しかし」と立ち止まられるのである。そして、氏は、小西甚一氏の論文「いづれの御時にか」（昭和30年発表）を出されて、この『伊勢集』から『源氏物語』へという関係が、やがては否定されて来るその経緯を説明される。

小西氏によれば、『源氏物語』の「桐壺」巻が構想のみならず文章表現にも唐の白楽天の「長恨歌」をいかに下敷きとしているかは議論の余地もなく、冒頭の「いづれの御時にか、女御更衣・・・」は「長恨歌」の冒頭「漢皇色ヲ重ンジ傾国ヲ思フ」の和文化であり、そこに紫式部の独創的表現があるとする。いっぽう、『伊勢集』の「いづれ

の御時にかありけむ・・・」という冒頭形式をもつ流布本（桂宮本。歌仙家集本。群書類従本等）とは別に、「寛平の御時・・・」と起こされる西本願寺本の形態に注目して、後者が原形であり、前者の形態は「歌集としての『伊勢集』が歌物語のやうな性格において意識されたとき、桐壷の書き出しを模倣した結果だろうと思うのである、と推論されたのである。

なんとなく通説をうのみにしていたそのころの私にとっては、小西氏の見解は衝撃的であったが、この論文が発表された同じ年、関根慶子『伊勢集の三系統をめぐる考察』、島田良二『伊勢集（本文篇。研究篇）』が期せずして刊行され、これらによって小西氏の見解は強力に支援されたといってよいだろう。両氏とも『伊勢集』の三系統の本文の性格と構造をあきらかにしたものであったが（関根氏は西本願寺系統。群書類従本系統。歌仙家集本系統と呼び、島田氏は第一類・第二類・第三類と呼んだ）いかにも小西氏によって説かれたように、『伊勢集』（第二・三類本）冒頭の「いづれの御時にかありけむ・・・」という形態は、『源氏物語』の冒頭を襲ったとみるべきであった、と。

ところで、秋山氏は、西本願寺の系統本を採る集英社刊『伊勢』の中では『伊勢集』伝本についての積極的な選択はされていない。しかし、氏が早くに刊行された『王朝女流文学の形成』（塙書房刊　昭和42年3月30日初版発行）所収の『伊勢日記解』の中で、後に片桐氏も断定されたように、現存『伊勢集』の伝本の三系統が同一祖本から出たものであることの疑いないことを述べた、その上で、「詞書自体の間には必ずしも成長関係をたどり難い面もあるけれども、歌の出入の調査から第一類本の形態が、もっとも原型に近いとされる関根説（『伊勢集の三系統をめぐる考察』お茶の水女子大学『人文科学紀要』第6巻　昭和30年3月刊）は動かし難いと思われる」として、西本願寺本系統を、最も古態に近い伝本と目されて、これを支持されている。

『伊勢集』を読んでゆく上で、いずれの伝本に依るべきか、稿者もまた、今、その選択を迫られる時に来た訳だが、稿者も、これは島田良二氏も支持されるところだが、（『私家集大成』中古Ⅰ　解題）その古態のゆえをもって、関根氏説を支持される秋山氏の驥尾に付して、西本願寺本系統（一類本）の伝本に依りたいと思う。

と同時に、時代の碩学実隆が、三十六歳という、その盛年の時にあって筆を染めた二類本系統、特に定家が、恐らくは、その羸弱の身を鼓舞して、書写のことに立ち向ったと想像される三類本の祖本にもまた、稿者は強く心惹かれるのである。

そのこと、「三類本」の祖本である藤原定家筆『伊勢集』への稿者

の強い執着について述べる、これからの叙述の暫らくは、全くの推論の域を出ないのだが、定家が、建仁二年（一二〇二年）六月、四十一歳の時を最初に、三十年余にわたる『勢語』書写の、恐らくは、その最後と思われる「天福本」（一二三四年書写）の奥書に、

天福二年正月廿日己未申刻、凌桑門之
盲目連日風雪中、遂此書写。

と書いた、その心勢いを、稿者は、藤原定家自筆冷泉家本『伊勢集』の、たっぷりと墨を含んで伸びやかに流れる影印に対しながら、ここでも改めて、感じないではいられなかったのである。

『勢語』を昔男の一代記と読めば、その昔男に比定されるのは、『古今和歌集』に採歌されたその歌かずを、他ならぬ伊勢と相前後する業平である。『古今和歌集』の歌人として、採歌を得た歌かずは、業平三十首、これは貫之ら撰者に次いで集中第六位、そして、伊勢は二十二首、小野小町の十七首をひき離して女流歌人の首位に位置し、これは、業平に次ぐ第七位の順位である。

業平と伊勢と、『勢語』の主人公と『伊勢集』冒頭の物語的部分に於ける女主人公とは、『古今和歌集』の中にあって、端なくも比肩しているのである。

ところで、定家は、われわれの知り得る限りでも、前後八回と言う執拗なまでの『勢語』書写のことを繰り返しているのだが、その中で、書写年次の明らかな第五回目、定家七十歳の寛喜三年（一二三一年）八月、その書写の事に係わる『明月記』の記事は次の如くである。『明月記』は『勢語』書写の三十年余について多くを語らない。『勢語』の書写のことについて触れるのは、僅かに一度、右の寛喜三年八月七日の記事だけである。

寛喜三年八月七日、庚申。天晴る。未後俄に大雨。暫くして休む。徒然の余り一昨日より盲目の筆を染め、伊勢物語を書き了んぬ。其の字、鬼の如し。（原文表記は漢文）

日盛りを過ぎる頃に来た大きい雨の後の涼の中で、しかし、彼の気持は異常に高ぶっている。「徒然の余り一昨日より」という、その一昨日の五日には、

天晴陰。夜より大風頻りに扇る。夜猛烈。朝の間徒然に依り、盲目を以て小草子を書く。暑気殊に甚し。（原文は同右）

とある。寛喜三年八月五日は、これをユリウス暦に換算すれば、一

二三一年九月二日に当る。続く翌日の記事にも、

六日、己未、朝間猶大風。少雨漸くにして止む。巳後晴る。

とあるから、四日夜半か、五日の未明からか、吹きはじめた大風は二百十日の台風であったのかも知れぬ。それなら、台風の来襲は順当ではあるが、寛喜三年のこの年の気象は極めて不順で、諸国に大飢饉（寛喜の飢饉）が起り、それは翌四年に及び、京都にも飢餓で落命する者が多数であった。

そういう騒擾（そうじょう）の中で、定家の身内をせめぐ「徒然」が何であったのか。彼の身内に、余人には解し得ぬどんな焦立ちがあったのか。どんな寂寥が彼を捉えていたのか。

その日録にただ一度『勢語』書写のことに触れる寛喜三年（一二三一年）、定家七十歳を起点にして、恐らくは『勢語』書写の最後の年と思われる天福二年（一二三四年）、彼七十三歳を終点とする四年間の『明月記』の記事は、貞永元年（一二三二年）の年間僅か二日だけという散見記事の例外を除いて、天福二年（一二三四年）は、丸ごとの記事三カ月、寛喜三年（一二三一年）は、これも丸ごとの記事六カ月、そして、天福元年（一二三三年）に至っては、十二カ月記事を完全に満たす克明を極めたものなのである。

因みに、天福二年には、その三月に、それまで七回にわたって書写を続けて来た『後撰和歌集』の最終的な校訂を、彼は行なっている。この校訂本は、以後冷泉、二条両家の証本として受け継がれて、歌道の世界で重きをなすと共に、江戸期以降広く行なわれた流布本の祖となったものであり、この定家筆天福二年三月本そのものは、いまなお冷泉家に秘蔵されている。

時に七十歳という老齢の定家に、抗（あらが）い難い肉体の衰えがあったのは事実としても、前掲三度にわたって踵を接して出て来る、『明月記』の記事やまた、『勢語』書写「天福本」の奥書に於いて、「以盲目」「染盲目之筆」「凌桑門之盲目」と繰り返して書きつけてゆく定家のこの言葉は、それゆえに、そのままには信じ難い。

己が身の「盲（めしい）」を誇示するかにも見えるこの言葉には、実に三十年余に及ぶ度重なる『勢語』書写の間、定家の身内を揺ぶり続けて来た、一つの確たる『心勢い』が集約されていはしないか。「其字如鬼」という、その彼をして「盲目之筆」を染めしめたものは何か。そして、「連日風雪中」に在って「凌桑門之盲目」いで、彼を『勢語』の書写に駆り立てて行ったものは何であったのだろうか。天福本の奥書は、前掲の文言に続けて、

為授鍾愛之孫女也。同廿二日校了。

の識語を残している。だが、心勢うて止まぬ定家の老いの目に映っていたものが、実は「鍾愛之孫女」の、恐らくは、まどかなるその面輪であったのだと、そのように尋常に肯なうことは、稿者にはどうしても出来ないのである。

定家が『古今和歌集』の校訂をし遂げたのは、早く貞応二年（一二二三年）、六十二歳の時である。それは、八回にわたって繰り返して来た『勢語』書写の、ちょうど第三回目書写の年に当る。仮に、その貞応二年の時を待たずとも、『勢語』書写第一回目、建仁二年（一二〇二年）の三年後の元久二年（一二〇五年）三月、四十四歳にして、『新古今和歌集』を撰進するに至った、その時点で、『古今和歌集』は、それからの『新古今和歌集』への採歌が注意深く検されているという点に於いても、既に、定家にとっての通暁の書であった筈である。

その『古今和歌集』が所収する業平の歌は三十首、それは、そのままかっきりと三十首、『勢語』におさめられながらも、しかし、それは『勢語』の詞章の中で、多くの変質を遂げている。その変質の中に、自らは王室の血を承けながらも、祖父の平城天皇や父親王の悲運の生涯に連なるがゆえに、藤氏独裁の、その貴族社会のアウトサイダーとして生きざるを得なかった業平の、その口惜しい風狂の生が描かれた、それを描破する筆の中に、『勢語』の作者たちが、業平に寄せたに違いない熱い共感を、定家は読み取っていたのではないのか。

定家の身内にあって、その自分でも手に余る「徒然」――寛喜三年八月七日の、前掲の記事に続けて、

小浴の間、右京大夫俄に駕を抂ぐ。流汗構へ出して面謁す。旧労空しく恨み有るの由述懐。尤も道理と謂ふべし。（原文表記は漢文）

と定家は書く。知友の「労」の、その報われぬことの悲嘆は、同時に彼自身の嘆きでもあった。それより一カ月余の、同年九月十三日の『明月記』の条は、次のような彼の自作詩を載せる。

涼秋九月月方幽　況寂閑人憶旧遊
良夜清光晴未忘　当初僚友往無留
不眠不臥謫居思　誰問誰知沈老愁
白露金風爰計会　満袂吹袖涙淙々

全篇に漲る哀傷は、今となっては、とり戻す術とてない盛年の日の喪失に向けられた嘆きにのみあるのではない。頸尾の二聯の、その述懐

は、志を得ざりし者の痛恨の言葉であり、これは中納言を望んで容れられなかった傷心の七律であったと言われる。

『明月記』に筆を染めた治承四年（一一八〇年）青年客気のその日から、定家の内に秘められた自意識は、生涯にわたる絶えることのない苦悩を彼に強いた。歌学の伝統などとは凡そ無縁の次元で変動を続けてゆく時代の中で、父俊成の跡をうけて、父がそうしたと同じように、御子左の歌学の家を世間に認識させるべく宿命づけられた定家が、その自意識と、家門を守るための官位への執着とで、時代に棹さして生きねばならなかったその五十年がどんなに焦立ちに満ちた明け暮れであったことか。（拙稿「土佐日記私考　下」『文学』昭和五十六年七月刊）定家にあっての、その「徒然」は、かくの如くにも、久しいものではあった。

『勢語』書写の三十年余に及ぶ、殆んど半生に近いその営為は、或いは、業平が自らの生きざまとして、口惜しくも選択して生きねばならなかった、その悲しい風狂の営みと日毎に、定家が自らの生を重ねて生きようとする願いに出でたものではなかったのであろうか、と稿者は思う。その業平との生を共有することに於いて、定家は、己が「徒然」の、恐らくは、汚穢にまみれて生きるような、その日常的な生活の焦立ちの次元を越えて生きよう、それは、日常的な生活の焦立ちと背中合わせにある、風狂に生きる無用者の寂寥を同時に生きることではあったが、――と願ったのではなかったのであろうか。

その業平と相接して『古今和歌集』に二十二首の採歌をみる伊勢の歌の中『伊勢集』冒頭の、その作品構成の方法に於いて、『勢語』に通う歌物語的部分に採られた歌は、僅々五首に過ぎない。が、その『古今和歌集』からの採歌が少ないということが、歌物語的部分の三十余首、これを伴信友の『表章伊勢日記附証』に倣って、秋山氏は「伊勢日記」として捉えておられるが、その「伊勢日記」の、『伊勢集』に於ける後続家集、定家書写本系統で算定して四八一首に対する比重の軽さを示している訳では決してない。

今、因みに『古今和歌集』に入集する伊勢の歌二十二首を挙げれば、

春　歌　上

帰鴈をよめる

31はるがすみたつをみすててゆくかりは花なき里にすみやならへる

水の邊（ほとり）に梅の花さけりけるをよめる

43春ごとにながるゝ河を花とみてをられぬ水に袖やぬれなん

44年をへて花のかゞみとなる水はちりかかるをやくもるといふらん

やよひにうるふ月ありけるとしよみける

61さくら花春くはゝれる年だにも人の心にあかれやはせぬ

亭子院歌合の時よめる

68みる人もなき山ざとのさくら花外のちりなん後ぞさかまし

夏　歌

題しらず

138五月こばなきもふりなむ郭公まだしき程のこゑをきかばや

物　名

からさき

459浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらむ

恋　歌　三

題しらず

676しるといえば枕だにせでねし物をちりならぬ名のそらにたつらむ

恋　歌　四

題しらず

681夢にだに見ゆとはみえじあさなあさな我おもかげにはづる身なれば

題しらず

733わたつみとあれにしとこを今さらにはらはば袖やあわとうきなん

題しらず

741ふるさとにあらぬものから我ために人の心のあれてみゆらむ

恋歌五

題しらず

756 あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる

なかひらの朝臣あひしりて侍りけるを、かれがたになりにければ、ちゝがやまとのかみに侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける

780 みわの山いかにまちみん年ふともたづぬる人もあらじと思へば

物思ひけるころ、ものへまかりけるみちに野火のもえけるをみてよめる

791 冬がれの野べとわが身をおもひせばもえても春をまたまし物を

題しらず

810 人しれずたえなましかばわびつゝもなきなぞとだにいはまし物を

雑歌上

中務のみこの家の池に舟をつくりて、おろしはじめてあそびける日、法皇御覧じにおはしましたりけり。ゆるさりつかた、かへりおはしまさんとしけるをりに、よみてたてまつりける

920 水の上にうかべる舟の君ならばこゝぞとまりといはまし物を

龍門にまうでて、たきのもとにてよめる

926 たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山ひめのぬのさらすらん

雑歌下

かつらに侍りける時に、七条の中宮のとはせたまへりける御返事にたてまつれりける

968 久方のなかにおひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる

家をうりてよめる

990 あすかがはふちにもあらぬ我がやどもせにかはり行くものにぞ

ありける

うためしけるときに、たてまつるとて、よみておくに

かきつけてたてまつりける

1000 山川のおとにのみきくもゝしきを身をはやながら見るよしもがな

雑　体

七条のきさきうせたまひにける後によみける

1006 おきつなみ　あれのみまさる　宮のうちは　としへてすみし

（後略）

題しらず

1051 なにはなるながらのはしもつくる也今は我身をなににたとへん

となる。この中、秋山氏の所謂「伊勢日記」の部分に採られているのは、恋部の733番と780番、それに雑歌部の926番と968番、更に、雑歌部の巻末に位置する1000番の、都合五首である。

元慶三年（八七九年）正月、蔵人に補された後、元慶五年（八八一年）二月から、仁和二年（八八六年）を経て、寛平三年（八九一年）の正月に至る間、三河守、伊勢守そして大和守と地方官を歴任して行った受領の父を持つ伊勢が、藤原基経の娘温子の許に宮仕えに出たのは寛平元年（八八九年）の頃、彼女十三歳から十八歳位にかけての時と推定される。伊勢が仕えた温子は、前年の仁和四年（八八八年）、父基経が係わった所謂「阿衡の論議」が漸く終熄をみようとしていた――仁和四年十月五日、宇多天皇は基経に屈服して、詔書の起草者橘広相の罪を糺して、この混乱を収拾することになる。（政事要略）――頃の十月六日に、践祚して僅か一年余りの二十二歳、気鋭の宇多天皇の後宮に入っていた。

父の基経は、元慶四年（八八〇年）の十一月、四十五歳で、人臣関白の初め（『公卿補任』）となり、翌十二月には、太政大臣（『三代実録』）更に元慶六年（八八二年）には、これも人臣最初の例となった、叔父にして養父の良房の故例に倣って准三后――太皇太后、皇太后、皇后の三后（三宮）に準じて、三宮と同じ年官年爵が与えられた――に推された。（『三代実録』）基経は、「みな大政大臣に関り白せ（あずかりもうせ）」（「仁和三年、宇多天皇が即位後、基経に与えた勅書」）とある綸旨の通り、百事はすべて彼への諮問を経ずしては奏聞もかなわないという絶対的な権勢の座にあった。少壮気鋭の宇多帝をして切

歯させた基経の、かかる顕栄を背景にする温子が、数ある皇妃の中に在って、宇多後宮の重石であったことは容易に肯なわれる。

その後宮に娘の伊勢を出仕させた父親の継蔭に何の計算もなかったと言えば嘘になるかも知れない。継蔭は、後半生を地方官で終ったらしいが、彼の任ぜられた三河は上国、伊勢と大和は、六十八国中十三国の中に入る、守は従五位上相当官の大国である。継蔭の父家宗は、従三位で参議も勤めた家格であれば、そして、伊勢の出仕が、他ならぬ基経や、また基経の姪にあたる房子、兵衛姉妹（姉の房子は、伊勢の父継蔭の兄弘蔭に嫁している。また歌人である妹の兵衛は、従姉妹の温子後宮の文学サロンにいて、伊勢とは歌の上での交わりがあったと推定される）らの推輓によった気配もあるので、継蔭が娘の上にみた夢は必ずしも荒唐とばかりは言えないかも知れない。後の一条朝とは趣を異にして、宇多朝の皇妃が、摂関家や高級貴族の娘に限られなかったことを根拠に、また、『伊勢集』冒頭の、伊勢が温子の許に「さぶらひけり」の一句は、『勢語』第六段の、高子が従姉妹である、文徳天皇の女御明子のもとに「仕うまつるやうにてゐたまへりける」と同趣の表現と解すべく、伊勢もまた高子と同じく、いわば、温子と同居する客分として、温子と共に居たと捉えるべきであるということを根拠に、伊勢の出仕には、彼女を皇妃にしようとする継蔭の願いをも視野に入れての基経ら藤氏一門の意図があったとする加納重文氏の推論「伊勢の御私見」のお考えを、秋山氏も肯定されている。

これらの、伊勢出仕の意味について、稿者に疑義がないわけではないが、それは、該当段の評で考えるとして、そういう継蔭らの思惑を、恐らくは、何も関知することなく出仕したであろう伊勢には、初めての恋が待っていた。

寛平二年（八九〇年）に十六歳で元服をした、温子の異母弟藤原仲平との恋である。だが、この恋は、仲平の裏切りのため、二年を出でずして終ってしまう。父基経や、やがて朝政の指導者となる、一世源氏にして中納言、右大将である義父の源有能らの計算を、恐らくは、知りながらの仲平の裏切りであった。

親の敷いたレールがあったとして、それを歩きはじめていた自分を、もし伊勢が自覚することがあったとしたら、それから自分を解放する方法は、仲平との恋に己を賭けることであったろう。絶望は深く、温子の後宮を出でた伊勢は、その後の暫くを、父の任地の大和で過ごすことになる。

やがて傷心も癒えたかにみえる伊勢が、温子の招きで、再び宮廷の人となった時、彼女は、もはや以前の稚い女ではなかった。

再び言い寄って来る仲平にも、新しく恋慕の思いをよせる仲平の兄の時平に対しても、伊勢の拒絶は烈しかった。「文ばかりをなむ通は

しける。（されど）逢はざりけり。「うちとけたるけしきにいふを、（男も）あはれと思ふ。されど逢はでやりつ。」という、それは、身勝手な男に対する返報というよりも、自らの稚さを他ならぬ自らに許さない自己裁決の厳しい姿勢であった。

前掲『古今和歌集』所収の恋部の780番と雑歌部の926番、更には、恋部の733番の歌は、この順序で『伊勢集』冒頭の物語的部分――秋山氏の所謂「伊勢日記」相当部分――に採られて、右に述べた仲平との恋の経緯を象っている。特に780番の歌は、前掲の通り、その詞書に、個有名詞としての仲平の名を出して、その係わりを記しているところからも、『伊勢集』との直接の承接関係を考えていゝだろう。

その仲平兄弟との係わりを経て、菅原道真の娘聟である源敏相や、また「平中」こと、平貞文との交渉を描いたあと、『伊勢集』冒頭の物語的部分は、宇多天皇との間に生した皇子の出生と、その余りにも早い死のことを述べる。それは、史実に徴すれば、寛平八年（八九六年）頃から延喜四年（九〇四年）位、伊勢の20歳か25歳頃から28歳か33歳位のことゝ思われる。

（皇子薨世の）またの年（延喜五年、『古今和歌集』撰進の年、頃か）の五月五日、ほととぎすの鳴くを聞きて、

死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人のうへ語らなむ

親の敷いたレールがあったとして、しかし、それは伊勢にとっては、恐らく関知することのなかった筈のそのレールの上に、これも恐らくは、その意志とは殆んど無関係に立たねばならなかった時の、彼女のその精神風景を思う時、稿者は暗然とならざるを得ない。

これかれ、とかくいへど聞かで宮仕へをのみしけるほどに、時の帝召し使ひたまひけり。よくぞまめやかなりけると思ふに、男宮生まれたまひぬ。

と『伊勢集』の所謂「伊勢日記」の部分の歌、二十二番の詞書の条が、いかに伊勢の、その会心を叙述していても、更に後続家集の部分の、西本願寺本系統で二三四と二三五番の贈答（これは歌の配列が反対になっているが）、また二五〇と二五一番の贈答に於いて、帝の伊勢に対する殊遇の程が、いかに述べられていても、稿者は、「召人」としての伊勢の傷心を思わずにはいられないのである。

右にあげた、「使われ人」として、宇多との間に生した亡き皇子に寄せる彼女の独詠は、そうして選ばねばならなかった、多くの后妃に

囲まれた帝との愛の、所詮は、確かめ通すことの出来ないその終わりを予感して、仲夏の暗夜に放つ嘆きの絶唱である。

伊勢の、生身の女として生きることの、そのあてどのなさ、それは、主人の温子にあっても事情は変らなかったようである。秋山氏がいみじくも描破されたように、父基経の強大な権力を背景にする温子は、天皇の妻の第一人者であったと共に、彼女に独特な不幸をもまた同時に、背負い込まねばならなかった。基経と宇多帝との確執は『宇多天皇御記』に詳しい。その基経が死んだあとも、温子は異母兄弟たちにとって、父親の権勢を保持し続けるための貴重な足がかりであることには変わりがなかった。宇多帝にしてみれば、そうして時平らの願望に支えられている温子は、やはり他者として厳しく疎外すべき存在であるほかはないだろう。女性として最高の地位にありながら、温子自身の人生は、空虚を抱いていたのではなかったか、というのが秋山氏の理解である。

后(きさき)の御心、限りなくなまめきて、世にたとへむかたなくなむおはしましける。

（「伊勢日記」第十二段）

という、温子の伊勢に寄せる労わりの優しさは、前後二十年にわたる伊勢出仕の間、終始変わることがなかった。

前掲『古今和歌集』所収歌で、『伊勢集』冒頭の物語的部分――所謂「伊勢日記」の部分――に採られている、残り二首の中の一首、雑歌部の968番は、その詞書に温子の伊勢に対する労わりを述べ、歌は、その温子への伊勢の信頼を述べたものである。前記780番の歌の場合と同様に、こゝもその詞書と歌と相俟って『伊勢集』との直接の承接関係を考えていゝところである。

その温子の優しさは、温子自身の側に立ってみれば、或は、彼女が己自身の傷心を慰撫することのてだての一つであったのかも知れない。そう言うことに語弊があるとすれば、温子と伊勢は、一人の尊貴の人を共に夫として持つことで余儀なく分け合うことになった二人に共通の不幸を、そして、遂に終熄することのないその不幸を背負い続けることに於いて、その長い悲しみの時間の中で、二人だけの理解を持ち合うに至ったのだと言えよう。

少くとも、伊勢にとっては、その人の存在こそが、今は己の生きる支えであると言っていゝ、温子であったが、その温子との死別の時がやがてやって来る。『伊勢集』冒頭の歌物語的部分の終章である。

『伊勢集』冒頭の物語的部分に採られて、温子との死別を語る条――

一類本では、これが、家集の最末尾に補入されている。関根氏の説かれるように、これは錯簡脱落とみるほかあるまい、という諸注に従って置く――の直前にある、いま一首の、1000番の歌については、この歌が『古今和歌集』に所収の場合と同趣旨の詞書を伴って『伊勢集』のこの位置にあることの疑義については、いまだ結着をみないでいる。

がそれはともかく、『古今和歌集』雑歌部の巻末、ちょうど1000番のこの歌の、その詞書に徴すれば、伊勢には、自撰の家集があったことが分かる。『古今和歌集』撰集のための資料として、朝廷から、それの提出を求められたという風に、ここの詞書は読めるのだが、秋山氏の言われる通り、「詠みて奥に書きつけて奉りける」とあるからには、それは、かなりの量の歌数をおさめる巻子本であったろうことが想像される。

その自撰の家集と、前掲の二十二首と、また『伊勢集』冒頭の物語的部分の歌どもとが、どう係わっているのか分明ではないが、そうして家集を召されたり、また『古今和歌集』に採られた前掲の二十二首が、春部五首、夏部一首、物名部一首、恋部八首、雑歌部五首、雑体部のうちの長歌一首、また雑体部のうちの誹諧歌一首と、六つの部立にわたって広く分布する、これは、業平の歌三十首が、春部三首、秋部二首、賀部一首、羇旅部三首、恋部十一首、哀傷部一首、雑歌部九首と、七つの部立に分布するのに優に匹敵する。序に言えば、前述小町の十七首は、私的な恋部に十三首、あとは、春部一首、雑歌部二首、雑体部のうちの誹諧歌に一首として散見するのみである。

その状況からみて、伊勢は、より強く、古今歌壇の男性歌人たちに伍する公的文芸としての和歌の作者として、撰者たちに把握されていたことが分かる、と秋山氏は言われる。

その女性ながらも、古今歌壇の中枢的な存在として、旺盛な作歌活動を続けて来た伊勢の、二・三類本の算定で五百首――そのすべてが伊勢の作とは言えないが――に余る歌かずの中から、その三十余首を抽出して、所謂「伊勢日記」として巻頭に据えた、そのことに『伊勢集』撰者の伊勢に対する思い入れの深さを、稿者は思うのである。

業平が、その悲運の王家の血を承けて、宿命的に生きざるを得なかった「放縦不拘」の男の境涯と、伊勢が、藤原北家と係わる貴族の家に生まれて、既定的に男に従属する生を余儀なくされた女の境涯と、その二つを等しなみにみることは勿論出来ないのではあるけれども、共に、「作歌」という感性と理性のはざまの営為に、自らの宿命を越えようとした、そのことに於いて両者は等しい。

稿者は、先に、全くの推論の域を出ないと断った、暫くの叙述をこゝで終わるわけだが、淡褐色の鳥の子紙の表紙に、たっぷりと墨を含ん

だ筆を下して『伊勢集』と、打ちつけに大きく題する定家が、『勢語』書写に立ち向う時に覚えていたであろう心勢いを、『伊勢集』撰者の、伊勢に対する思い入れと等しなみに、ここでも再び感じていたであろうと想像することは、強ちに当を失した想像でもないように思う。

業平の、アウトサイダーとして生きた、その無用者の寂寥に下り立った風狂の生と同じと言うには、伊勢の境涯は、あまりに多くの情念にかゝずらっている。いや、そういう人間に本然の情念にかゝずらっている伊勢であったからこそ、終生を、その「徒然」にとらわれ続けた定家にとっては、熱い共感の対象であり得たのではないか。

『伊勢集』を読んでゆく上で、いずれの伝本に依るべきか、その選択を前にして、稿者は、定家の仕事を仲介に、あわよくば『伊勢集』の概括をも試みようとしたのだが、然し、事は迂遠に過ぎたようだ。

今、『伊勢集』冒頭の物語的部分の読解に当って、稿者は、先に選んだ、西本願寺本系統（島田良二氏の命名による一類本）に依ると同時に、右縷説に於いて強く惹かれた通りの、定家自筆本を祖本とする三類本をもまた、右に併べてこれに依りたいと思う。そして、必要に応じて、実隆が筆を染めた群書類従本系統（二類本）をも参看してゆきたい。

なお、右伝本の引用本文は、「『私家集大成』中古Ⅰ」（明治書院　昭和四十八年刊）に依ることにする。

本文は、読解の便宜のため、原伝本の仮名書きの部分に適宜漢字を充て、宛字を正し、仮名遣いを統一し、濁点・句読点を付し、かつ適当に段落分けをする。

また、西本願寺本系統の本文と定家自筆本系統の本文を併記するに当っては、おおけないことではあるが、吉澤義則博士の『対校源氏物語新釈』に倣わせていただいた。

両者の対校には、その記号として、黒点と括弧とを使った。本文右傍の括弧で囲んだ部分は、定家自筆本系統の本文で、黒点は、西本願寺本系統の本文にはありながらも、定家自筆本系統では、その詞を欠いている事を示している。例えば、

（う）　・・・・・（なども）

親いと愛しくして、なべての男は・・

（ざりけるを・・・・・・・・・）

あはせじと思ひてさぶらはせけるに、

とあるのは、西本願寺本系統には、

親いと愛しくして、なべての男はあはせじと思ひてさぶらは

せけるに、

とあるのが、定家自筆本系統では、

親いと愛しうして、男などもあはせざりけるを、

となっているという意味である。

付記　本稿の成稿に当っては、秋山虔氏の御作『伊勢』（集英社・昭和60年8月刊）及び、片桐洋一氏の御作『伊勢』（新典社、昭和60年8月刊）から多くのご教示とご示唆をいただいた。

なお、本稿は、「伊勢日記私注」(二)に継続するものである。

高松短期大学研究紀要

第 17 号

昭和62年 3 月15日　印刷

昭和62年 3 月25日　発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01　高松市春日町960
☎（0878）41－3255

印　　刷　高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地